

2025. 9. 7 (日) 使徒26:1~8

26:1 アグリッパはパウロに向かって、「自分のことを話してよろしい」と言った。そこでパウロは、手を差し出して弁明し始めた。

26:2 「アグリッパ王よ。私がユダヤ人たちに訴えられているすべてのことについて、今日、王様の前で弁明できることを幸いに思います。

26:3 特に、王様はユダヤ人の慣習や問題に精通しておられます。ですから、どうか忍耐をもって、私の申し上げることをお聞きくださるよう、お願いいたします。

26:4 さて、初めから同胞の間で、またエルサレムで過ごしてきた、私の若いころからの生き方は、すべてのユダヤ人が知っています。

26:5 彼らは以前から私を知っているので、証言しようと思えばできますが、私は、私たちの宗教の中で最も厳格な派にしたがって、パリサイ人として生活してきました。

26:6 そして今、神が私たちの父祖たちに与えられた約束に望みを抱いているために、私はここに立って、さばかれています。

26:7 私たちの十二部族は、夜も昼も熱心に神に仕えながら、その約束のものを得たいと望んでいます。王よ。私はこの望みを抱いているために、ユダヤ人から訴えられているのです。

26:8 神が死者をよみがえらせるということ、あなたがたは、なぜ信じがたいこととお考えになるのでしょうか。

#### <説教>

使徒パウロはカイサリアにいて、ユダヤの王ヘロデ・アグリッパ二世の前にいます。そのようになったのは、ユダヤの総督フェストゥスがアグリッパにパウロのことを話し、それでアグリッパがパウロの話聞いてみたいということになったからでした(25:13-22)。それはフェストゥスにとっても、ローマ皇帝に上訴したパウロをこの後ローマ皇帝のところに送るときに皇帝に書き送るべき事柄、上訴の理由を得るのに好都合なことでした(25:24-27)。パウロは同胞のユダヤ人たちからいのちを狙われ、犯罪人として総督に訴えられていました。なぜならパウロが、十字架で死なれたイエスはよみがえられた、イエスこそ神の約束のメシヤ、すなわちキリスト、救い主だと宣べ伝えていたからでした。イエスを信じないユダヤ人たちはそんなパウロを邪魔に思い、〈もはや生かしておくべきではない〉と総督に訴えていたのです(25:24)。しかしそんな訴えは当時のローマ帝国の法律では死罪には当たりませんでした(同)。それでもユダヤ人たちはパウロを訴えることを止めなかったのでパウロはローマ皇帝カエサルに上訴することにしました(25:10-11)。こうして主イエスがパウロに言われたようにパウロがローマで主イエスのことを証しし、主イエス・キリストの福音を宣べ伝える道が開けたのでした。もっとも、それですぐにパウロはローマに行くことができたかという、そうではなく、主イエスのみことばが与えられてから2年が経っていました。その間にもパウロのいのちは狙われ続けました。しかし主はローマの総督や千人隊長たちを用いてパウロを保護し続けてくださったのでした。

こうしてパウロはアグリッパ王やその妹ベルニケ、そして総督フェストゥス、その他この世の権威ある人々の前で〈自分のことを話し〉、〈弁明〉する機会を得ました(26:1)。

もちろんパウロは自分の安全安心のため、いのち惜しきで弁明しようとしたのではありません。パウロは主イエスから受けた、神の恵みの福音を証しする任務を全うできるなら、自分のいのちは少しも惜しいと思っていませんでした(20:24)。ですから、ここでアグリッパ王の前で弁明することも、これまで多くの人々の前で語って来たのと同じように、主イエスから与えられた証し、福音宣教の良き機会としました。もともと主イエス・キリストを信じたときからパウロは自分に対する主のみことば、みこころを教えられていました。つまり、〈あの人はわたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子らの前に運ぶ、わたしの選びの器です。彼がわたしの名のためにどんなに苦しまなければならないかを、わたしは彼に示します〉(9:15-16)ということです。また、「人々はあなたがたに手をかけて迫害し、会堂や牢に引き渡し、わたしの名のために、あなたがたを王たちや総督たちの前に引き出します。それは、あなたがたにとって証しをする機会となります。ですから、どう弁明するかは、あらかじめ考えない、と心に決めておきなさい。あなたがたに反対するどんな人も、対抗したり反論したりできないことばと知恵を、わたしが与えるからです。」(ルカ 21:12-15)との主イエスのみことばも他の弟子たちから聞いていたはずでした。こうしてパウロは自分がアグリッパ王の前で弁明することで、主のみこころが行われ、自分も主のみこころを行うことが許されていると確信していました。そのことをパウロは「幸いに思います」と言ったのです(26:2)。

アグリッパ王がユダヤ王の家系の中でも〈特に、ユダヤ人の慣習や問題に精通して〉(3)いたとユダヤ教の文書にも記されているそうです。ですから、パウロはここで別にお世辞を言っているのではありません。むしろ「それならば、この後私が言うことは当然分かるはずです」と(もちろん口調は丁寧ですが)と念を押しているかのようです。確かにパウロはローマ皇帝の前にも立とうとしていましたから、ユダヤの王であれ、総督であれ、千人隊長たちであれ、誰の前に出ても恐れることはありませんでした。それは(私たちがこれまでも学んで来たように)、パウロは〈いつも、神の前にも人の前にも責められることのない良心を保つように、最善を尽くしてい〉(24:16)たからでした。何よりも主イエスがみことばの通りに、聖霊によっていつもパウロと共にいてくださり、語るべきことば、なすべき行いを教え、力を与えてくださっていたからです。写本には「…パウロは、確信に満ち、聖霊に励まされ、…弁明し始めた」(1)とあるそうです。

聖霊に励まされたパウロはまず主イエスをキリストと信じる前の自分のことを話しました(4-5)。私の犯罪については訴えるだけで何も証言できないユダヤ人たちでも、私が〈私たちの宗教の中で最も厳格な派にしたがって、パリサイ人として生活してき〉たことだけは確かに証言できるとパウロは断言しました。

しかし、そんな自分が〈今、神が私たちの父祖たちに与えられた約束に望みを抱いているために、私はここに立って、さばかれている〉(6)とパウロは言いました。〈私たちの十二部族は、夜も昼も熱心に神に仕えながら、その約束のものを得たいと望んでいます。王よ。私はこの望みを抱いているために、ユダヤ人から訴えられている〉(7)とも言いました。誰よりも一番まともに、ユダヤ人たちが神から与えられた〈約束に望みを抱〉き、〈約束のものを得たいと望んでい〉るのでユダヤ人から訴えられているとは変な話です。

それで、問題は、その「神の約束」また「望み」とは何かということです。それが〈神が死者をよみがえらせるということ〉(8)なのです。しかも前回(23:13-27)の学びのとき

にも触れましたが、このパウロが言う「死者の復活」は、「死者イエスの復活」が絶対条件、大前提です。パリサイ人たちも「死者の復活」については認めていました。「神は全知全能だ、天地万物の創造者だ、だから死者をよみがえらせることもできる」。パリサイ人たちユダヤ人もそう信じていました。しかし、そんな「立派な」復活信仰を持つユダヤ人たちは「十字架で死なれたナザレ人イエスを神がよみがえらせた」ことを信じることはできませんでした。しかし「死者イエス・キリストの復活」こそが「死者の復活」の基です。〈もし死者の復活がないとしたら、キリストもよみがえらなかつたでしょう。そして、キリストがよみがえらなかつたとしたら、私たちの宣教は空しく、あなたがたの信仰も空しいものとなります〉(I コリント 15:13-14)。ですから「神の約束」「望み」とは、「神がイエス・キリストを復活させたように、イエス・キリストを信じる私たちをも二度と死ぬことのない、神にさばかれることのない永遠のいのちに復活させてくださる」という約束、望みです。そのことが今やイエス・キリストの十字架と復活によってはっきりと、確かになっています。私たちの望みはただ神に、主イエス・キリストだけにあるのです。